

あんなに暑かった今年の夏。ちゃんと寒くなるんですね。冷房ガンガンからいきなり暖房になり戸惑うばかりです。急に寒くなって、秋を飛ばした為か？東京はまだ紅葉は来ていません。

毎年東京で開催される北上市主催の企業懇談会は日比谷の帝国ホテルで。今年の講演はUTO岩手工場の玉澤工場長でした。当社の関係者は冷や冷やでしたが、本人は淡々とUTOカシミアをアピールしてくれて、好評に終わりました。

全国オーダー会が好評です。

【衣装提供】ライオンCM

ライオン株式会社「ソフランアロマリツ」のCMに、衣装を提供。広瀬すずさんに、UTOのセーターを着用いただきました。



【工場長玉澤】北上市企業懇談会で講演

7月、北上市が東京で開催した「北上市企業懇談会」にて、当社工場長の玉澤が講演を行いました。地域の活性化や企業誘致を目的としたもので、「北上でのものづくり・職人育成・品質維持」についてお話ししました。



【旅するカシミア】全国で開催中

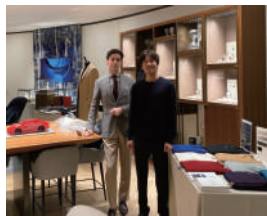
多くの方にUTOカシミアの肌触りを知っていただきたく、昨年より東京・大阪・名古屋・仙台などで「カシミア販売会」を開催。実際に手に取ってその柔らかさを感じていただける機会です。「試着してみたい」「色味を見てみたい」という方も大歓迎。予約不要ですので、お気軽にお立ち寄りください。

詳しくはこちら→



【旅するカシミア】台湾・パリでも開催

昨年より、岩手出身の方が「UTOをフランスに広めたい」と現地で活動。9月、パリ・オペラ座近くのスイス高級時計ブランド「Bucherer」で開催のPRイベントに招待され参加。日仏トランسدが参加し、来場者にはスイス時計のCEOや業界関係者なども多く、UTOのものづくりに高い評価をいただきました。



また台北の高級紳士服「Mr Manners」では海外初の店舗主催オーダー会を開催。「系ななど」富裕層の方々から、「洗えるカシミア」「ベビーカシミア」が好評を得て、多くの注文をいただきました。



カシミアおやじの

骨董通りの鑑定団

何やら縁が・・・

表参道駅から骨董通りに入った片隅にあるペンシルビル、「澁澤ビル」の6階で会社を立ち上げ33年が経ちました。小さな10坪の事務所エレベーターが開けばそこから仕事場。大きな窓から骨董通りを見下ろしながら、毎日仕事していました。

窓の下に見えたのは、この界限では珍しい柳と風情ある日本家屋の和菓子屋「菊屋」。右隣は、伊万里焼の店「からくさ」がありました。気になったのは、その店先にいつも立っていた和服姿のいかつい親父さん。まるで通り全体を睥睨するように、威圧感のある佇まいで立っている姿が目につきました。

それから1年ほど経ったころ。テレビ東京で『開運!なんでも鑑定団』が始まりました。素人の自慢の「お宝」を、プロの鑑定士が見極め、値段が高ければ誇らしげ、逆に安ければ落胆し、時には視聴者も羨むというバラエティ感に、島田紳助のやんちゃで軽妙な語り、石坂浩二の知的で紳士的な雰囲気が見事に絡み、たちまち人気番組となりました。

「あれ!？」と思わず声を上げました。鑑定士の席に見覚えのある顔が。そう、あの「からくさ」の和服の親父さんです。

中島誠之助さんはこの番組での名台詞「い

い仕事してますねえ！」で一世を風靡し、番組の名物鑑定士になりましたね。

その後、UTOは一度骨董通りを離れ、数年後に再び戻ってきたのですが、あの「からくさ」はすでに別の店に変わっていました。



澁澤ビルの隣の1階は、当時は優しい物腰のおばちゃんや宮むお蕎麦屋さんで、その2階には、飛行機専門の模型店「ウィング」があり、お訪ねしたことがあります。ご主人の矢野さんは、鑑定団に出演しているおもちやコネクターこと北原照久さんの親友。というより、コレクシヨンの師匠だったようです。

お会いしたとき、矢野さんは「病気で車椅子生活でしたが、ご自身の貴重な本をくださり、昔話をたくさん聞かせていただきました。」

そもそもこの「骨董通り」という名前を名づけたのも、中島誠之助さんご本人なのだとか。通りの奥の方には、西洋骨董の鑑定士をされている阿藤さんのアンティーク店もあり、「鑑定団」や「鑑定士」という言葉が妙に身近に感じられる街。何となく縁を感じます。

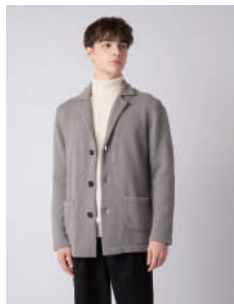
レディース:カシミア100% ドレープ カーディガン

ニュアンスある着こなしを実現するオープンフロントのカーディガン。羽織ると首まわりに、肩にかけるように羽織れば身頃にドレープが生まれ、色々な着方をお楽しみいただけます。春夏の冷え込み朝晩にも重宝する、オールシーズン使える万能カーディガンです。



メンズ:カシミア100% テラード ニット ジャケット

カシミアニットの心地よい柔らかさを堪能するテラードニットジャケット。カーディガンとジャケットの中間のようなイメージで、合わせるインナーによって様々な雰囲気を演出。きちんとした印象のテラードカラーとニットの表情がマッチした、デイリーユースのアイテム。



小物:カシミア100% ボディウオーマー(腹巻き)

お腹周りを優しく包み込むボディウオーマー(腹巻き)。伸縮性のあるリブ編みで、心地の良いフィット感を生み出します。寒い時期には防寒として、春夏時期には冷房による冷えの対策として。通年ご愛用いただけるカシミアの腹巻きです。



カシミアとニットの話 ＊（八十二）

ベビーカシミア

カシミアから一生に一度の贈り物



春、内モンゴルに雪解けの春が訪れると、カシミアヤギの厳しい寒さを守ってきたやわらかな産毛が、自然に抜け落ちていきます。この時期は「換毛期」と呼ばれ、カシミア牧民たちの収穫の喜びの時です。

牧民たちはその毛を刈り取るのではなく、櫛でそつと梳き取り、丁寧に集めます。そのため、動物にも自然にもやさしい採毛方法として、世界的に高い評価を受けています。この作業から生まれるのが、「ウールの宝石」と呼ばれる天然繊維、カシミアです。

その中でもさらに特別なのが「ベビーカシミア」です。生後一年に満たない子ヤギが初めて迎える春、その一度きりしか採れません。一頭から採れる量はわずか20〜30グラム。大人のカシミアヤギの5分の1以下です。

繊維径は13ミクロン前後と極めて細く、肌に吸い付くようなしっとりとしたぬめりと、羽のような軽さを持っています。

赤ちゃんの産毛のようにやわらかく、触れた瞬間に誰もが驚くほどの心地よい繊維です。

原料のほとんどは中国・内モンゴルの限られた地域。世界全体でも年間わずか100トン前後という、ごく希少な素材です。このため、ベビーカシミアの原料価格は一般的なカシミアの何倍にもなります。希少性と繊細さから、ベビーカシミアの供給をうけるのは、世界独占契約の、イタリアのロロピアーナ社とUTOに供給する日本

の東洋紡糸工業だけです。

糸の段階からすでに別格の存在であり、量産には決して向きません。だからこそ、私たちUTOはこの素材を、効率ではなく感動で作る製品と位置づけています。

この尊い原毛を、岩手・北上の職人たちがお客様のオーダーを受けてから一枚ずつ丁寧に編み上げます。



編み目のテンションや縮絨の加減は手の感覚が大事です。もちろん仕上げは自然乾燥で糸本来のぬくもりを生かしています。

この工程によって、空気を含むような軽やかさと、肌に寄り添うやわらかさが生まれます。大量生産では決して再現できない、日本の職人ならではの感性と精度です。

すでに上質なカシミアをお持ちの方も、「これがベビーカシミアなのか」と思わず口にしてしまうほどの、別格のやさしさで新しい驚きをもたらしてくれると信じています。それは単なる高級素材というだけでなく、自然と動物と人間がウィンウィンで生きる姿の結晶です。世界に誇れるUTO自慢のベビーカシミア。是非一度手を通してみてください。

おじんの遠足



この夏、久しぶりにハケ岳へ行ってきました。メンバーは、2005年発行のこの通信第15号に登場した「ヨシベのおっちゃん」こと伊藤さん（86歳）。創業からお世話になっているニット職人の内田さん（82歳）、そして私（74歳）。平均年齢80歳超えの、なんとも地味なおじんの三人組です。内田さんと伊藤さんは私がお二人と出会う前からの友人です。

伊藤さんは、私が旅行屋からニット屋に異色の転職した時から業界の大先輩として指導して頂き家にも泊めて頂きました。引退後は岐阜の伊那路の実家に。その後は内田さんと東京から岐阜までゴルフ遠征するのが年中行事になりました。

「毎年集まって、くだらない話をしようよ！」そんなことから始まった男たちの遠足も、気がつけば30数年。とはいえ年々体力は落ち、集まる間隔も2年、3年と空き、車での移動が厳しくなり、「じゃあ電車にして中間地点で落ち合おう」と、最初は夢科に集合しました。

伊藤さんは中央西線で千野まで。私と内田さんは中央東線で千野へ。そこに「心配だー」と、伊藤さんの商売の弟子だった「スガちゃん」が登場。豊田の老舗企業の社長さんながら、当日は素敵なボルボで伊藤さんを送り届けて一泊してくれたのです。私たちは気軽に「スガちゃん」と呼んでいます。が、実はかなり偉い人です（笑）。

その翌々年、コロナをはさんで再開したのがハケ岳の清泉寮。今回は伊藤さんは私の手配した切符通りに特急と普通列車を乗り継いで小淵沢まで。無事に合流した時は、皆で拍手でした。

そして今年。暑さを避けて再びハケ岳のリゾナーレへ。合流は小淵沢。伊藤さんは塩尻での乗り換えに手間取り、到着が1時間遅れ。

「塩尻は階段があるからさあ！あの乗り換え時間は無理だよ」「何時間かかってもいいさ、逢えりゃいいよ。時間は死ぬまであるからさあ！」

年寄り同士、そんな慰め合いを言いながら、今年も無事に「遠足」を実施。話す内容はたわいもない世間話や昔ばなし。奥さんたちは「毎年よくも飽きずに何をしゃべってるのかしら」と呆れているでしょうね（笑）。そんな時間が何よりの贅沢。来年も三人で集まれるよう、元気でいたいと思います。

想い出のホテルを旅する（八十二）

元 旅行屋のお勧め ロサンゼルス・USA

ミヤコホテル ロサンゼルス

ロサンゼルス・ダウンタウンのリトルトーキョーにあるホテル。いまは建物の側面いっぱい、大谷翔平選手の巨大な似顔絵が描かれ、昨年のドジャースのワールドシリーズ優勝パレードには、その壁画が大写しになる映像が幾度も流れました。

このホテルは、私にとっても想い出深い処です。50年も前、まだ海外旅行が「夢の出来事」だった時代に宿泊した懐かしい日系のホテル。当時の名称は「都ホテルロサンゼルス」。近畿日本ツーリストの運営で、日本から訪れる団体旅行者にとっては、安心できる「拠点」のような存在でした。

すでに現在の建物は建て替えられましたが、リトルトーキョーの中心地に位置し、日本語が通じるスタッフも多く、JALのCA（当時は「スチュワーデス」と呼ばれ、女性の憧れの職業でした）たちも定宿として利用し、「日本人がホッとできるロスの宿」だったのです。

ロサンゼルスの方々とした街中に、突如現れる木組みのやぐら。日本の象徴といえば、鳥居。だと思いい込んでいた私は、この「やぐら」がとても不思議だった記憶があります。

このとき私たちは、日本のアマチュア音楽家を海外に紹介し、派遣するというユニークな事業を展開していた、この旅は、静岡の女子高校生たちがアナハイムのデザイン・ランドで日本の歌を披露するという、文化交流が目的のツアーでした。観光ではサンフランシスコにも立ち寄り、彼女たちは浴衣姿で素敵な日本の歌を披露しました。



そんな彼女たちのステージを見ていて、ある日系人のおばあさんが目に涙を浮かべながら「懐かしいわねえ」と手を握ってくださいました姿に、私たちも胸が熱くなったのを覚えています。当時、海外はまさに「夢の舞台」でした。引率の先生や校長先生に、いくつかのホテルを紹介しましたが、「この都ホテルは日系です」と言っただとたん、「そこにしましょう！」と即決だったのも、時代を象徴するエピソードです。